

松 山 大 学 論 集
第 22 卷 第 1 号 抜 刷
2 0 1 0 年 4 月 発 行

地域と学生を結ぶ
大学教育プログラムの実践の試み

甲 斐 朋 香

地域と学生を結ぶ

大学教育プログラムの実践の試み

甲 斐 朋 香

〈目 次〉

はじめに

1. 大学発・まちづくりイベントの企画と運営
 - －「まつやま灯明ウォッチング」の成果と課題
 - 1－1) プログラムの概要
 - 1－2) 運営体制
 - 1－3) 成果と課題
 2. 関連教育プログラム
 - － 地域社会への関心を高めるための取り組み
 - 2－1) 演習科目
 - 2－2) 講義科目
 - 2－3) その他
- むすびにかえて

は じ め に

本稿は、2008 年度松山大学教育研究助成を受けて実施した教育研究プログラムに関する報告書である。

筆者は、2002 年度より、学内外からのボランティアを募り、大学のグラウンドにあかりの地上絵を描くイベント「まつやま灯明ウォッチング」を実施してきた。7 年目の実施となった本年度の報告書では、その成果及び課題と併せて、筆者が担当する講義及び演習科目や、地域社会における活動とのリンケージについても述べることにしたい。

1. 大学発・まちづくりイベントの企画と運営 ー「まつやま灯明ウォッチング」の成果と課題

1-1) プログラムの概要

本プログラムの中核となるイベントの主な内容は、以下のとおりである。

① 灯明アートによるグラウンドのライトアップ

6,000 から 7,000 個ほどの「灯明」をグラウンドにならべ、地上絵を描く。(但し、2008 年度は、前日から天候不良がわかっていたため、規模を大幅に縮小し、カルフルのピロティ部分に、600 個程度の灯明を用い、小さな地上絵を描いた。)

地上絵のデザインは、原画を地域の子供たちから募集した後に、ワークショップを開いて決定することとしている。ひとつの絵だけを選び出すのではなく、複数の絵の中からいくつかのモチーフを選び出して組み合わせるようにしている。

原画は、本プログラムが始まった 2002 年度より協力を得ている地域の絵画教室（柳原あや子絵画教室）に依頼した。協力依頼や絵の受け取りは、なるべく関連性のある調査研究テーマを持つ学生たちに、取材・調査も兼ねて行わせることとしている。学生たちは、絵画教室の主催者と話をし、絵や粘土などの作品を実際に見たり、教室に来る子どもの相手をしたりしながら、子どもたちの作品が、その心理状態や発達段階と密接にかかわっていることを学ぶ。

ワークショップでは、集められた子どもたちの絵を並べて鑑賞し、目についた複数のモチーフの中から「統一的なテーマ」あるいはそれにつながる「キーワード」を見出していく作業を行う。その後、各自、トレーシングペーパーとマジックペンで、地上絵のデザインに取り入れたいモチーフをなぞる。このように手を使う作業をすることで、子どもたちが描いた線のひとつひとつが「自分の身体に入り込んでくる感じ」をつかむ。出来上がってくるデザイン画に対する愛着や、その元となる絵やそれを描いた子どもたち（その幾人かは家族と

ともにイベント当日にも来場する)に対する親しみを深める効果もある。

地上絵の作成にかかわるリーダーを決め、トレーシングペーパーでなぞった図柄を、テーマとバランスを考えながら配置していく。

デザインが確定したら、次に、材料の手配を行う。イベントの趣旨から、材料の購入は、なるべく地域内で行うこととしている。

灯明のガワとなる紙袋は、大学生協を通じて入手している。現在のルートでは白色のものしか確保できない。このため、従来は、赤・青二色の布用染料(砥部焼作家を通じ、新居浜の藍染作家を通じて業務用サイズを購入)を用いて染める作業を行ってきた。一見非効率的なプロセスではあるが、スケジュールがあわず、実行委員会にはなかなか参加できないものも含め、学年も学部も違う学生たちが、作業をしながら雑談をし、交流を深めるのに有効である。二日間の作業が終わる頃には、よそよそしかった学生同士が、ようやく「チーム」としてのまとまりを見せるようになってくるのが通例である。但し、2008年度は、学生の提案で、この作業を省略することとした。

年によっては、紙袋に、高齢者や子どもなどに絵や文字をかいてもらう場合もある。2006年度は、こうした「お絵かき灯明」も計400枚ほどあつめた。これは、小学校の余裕教室を利用した松山市の地域福祉施設「生きがい交流センターしみず」(運営は松山市社会福祉協議会が中心となっていて行っている)の利用者や、2006年度の出店と展示の参加協力者であるスペイン語講師の子弟が通う幼稚園や小学校の園児・児童などに、白地の紙袋をあらかじめ配布し、回収したものである。

イベント前日、重し代わりの砂(DIY店にて1ト購入。大学の同窓会を通じて会社重役のOBと連絡・交渉を行っている)をトラックでグラウンドに搬入し、地上絵の下絵描きを行う。方眼紙に落としたデザイン画を参考に、鑑賞ポイントからの実際の見え方と照らし合わせながら、主要なポイントを測量し、釘や紐を用いて印をつけたり、ラインを引いたりしておく。地上絵の大きさは、縦横ともに60mあまりあり、使用する手作り灯明の数は、約7,000個に

ものぼる。

イベント当日は朝10時より会場設営をする。実行委員の学生はもとより、当日だけの設営ボランティアも学内外より40名ほど集まり、作業をする。このようなボランティア要員には、例年、筆者の受講生やゼミ生、顧問を務める学内サークルのメンバーや、教職員有志などのほか、砥部焼作家やその友人グループ、市役所職員有志、地上絵のデザイン原画を提供した絵画教室の生徒及びその家族・知人、精神保健福祉団体の関係者など、年齢も職種も多様なメンバーが集まってくる。

② 出店

例年、会場設営のボランティアへの炊き出しも兼ねて、出店を募っている。その際には、地産地消・国際交流・地域福祉・アートなど、なるべくまちづくりに広く関わるテーマを持つ市民グループを中心に参加者を探し、協力をよびかけることとしている。これまでに参加協力を得た個人・団体及びその主たる活動内容については、以下のとおりである。

・三番町町会有志グループ

「まちづくり学講座」の市民研究助成の対象者である。松山市側と地域住民との協働により、松山市中心部の街路に桜並木をつくるなどの活動を行っている。

・フリースペース「遊民館」メンバー

子どもの健全育成、若者の自立支援に関わる活動を行っている。

・愛媛大学学生起業家グループ「Asana Sante」:

2002年度に松山市及び松山市商工会議所が実施した学生起業家支援事業の対象者。輸入雑貨販売を行う。

・NPO法人「庚申庵 GCM 倶楽部」東雲女子大学生ボランティアスタッフ

江戸時代の俳人・栗田樗堂ゆかりの庵の維持管理、地域文化振興に関わる活動を行う。松山市学生政策論文がきっかけとなって発足した組織である。

・NPO法人「えひめグローバルネットワーク」

松山市から貰い受けた放置自転車を修理してモザンビークへ運び、武器と交換するなど、国際交流・環境保護に関わる活動を行っている。

・ストリートアーティスト「ひろし」

大街道アーケード内にて、絵葉書・色紙等販売を行っている。

・ストリートアーティスト「門田さん」

大街道にて絵葉書・小物等販売を行っている。近年では、従来迷惑行為とされてきた街角での音楽演奏や物品販売などの若者の活動も、まちに活気をもたらし要素のひとつとして見直されつつある。

・福祉法人作業所「しののめハウス」

精神保健福祉に関わる福祉法人「明星会」（現在はNPO法人「SORA」と組織改編されている）が運営する作業所である。通所者によるクッキー製作・販売を行っている。

・日印友好協会・鈴木靖彦さん

愛媛大学教員が中心となって、草の根国際交流を行っている「日印友好協会」の会員である。

・玉川町（現今治市玉川）道の駅「湖畔の里」有志グループ

地産地消、まちおこしをテーマとする有志のグループである。農家直送の農産物・手作り惣菜などを販売している。

・「俳句集団・いつき組」有志

愛媛を拠点とする俳人・夏井いつき氏を中核とした俳句愛好者のグループである。毎年夏に行われている「俳句甲子園」への募金やボランティアをはじめ、俳句をツールとした、教育・福祉・経済・まちづくりへの貢献にも積極的である。

・学内のスペイン語クラス（Ines 講師）

語学の講義と関連づける形で、アルゼンチンのレシピによるカップケーキ・コーヒーの販売、アルゼンチンの風土や文化などに関する展示を行った。

2008年度は、2年次ゼミ生の1グループが、地域の特産物であるキウイやかんきつ類などを用いたお菓子を考案し、来訪者に無料で振る舞った。当日の天候不良が事前に判明しており、作業の時間も短くて済むこともあり、その他に予定していた出店はほとんど中止となった。

③ パフォーマンス

パフォーマンスの協力者を探す際にも、出店と同様の方針で準備を進めている。ただし、2008年度は、諸般の事情から、これらのパフォーマンスは省略した。

これまでのイベント実施に際しては、以下の市民グループ及び個人の協力を得ている。

- ・愛媛県立伊予高校吹奏楽部（全国高校吹奏楽コンクール全国大会受賞校）コンサート
- ・フリースペース「遊民館」メンバー ギター弾き語り
- ・地元俳人有志（『子規新報』編者）「灯明句会」
- ・愛媛大学職員・香道愛好家 聞香会
- ・NPO 法人「Velotaxi」（新型自転車タクシー）大学構内試乗会
- ・「俳句集団・いつき組」「灯明吟行会」及びテレビロケ
- ・松山大学邦楽部部長 琴生演奏
- ・実行委員スタッフによる餅つき
- ・チャンゴヨロガザ 韓国の伝統楽器演奏
- ・学生バンド
- ・障害者福祉の関係者によるバンド「メゲنز」による音楽演奏

④ その他

年によっては、その他、サイドイベントも実施する場合がある。以下、これまでに実施された企画のうち、比較的大がかりなものを挙げておく。

- ・「たいせつ人フォトリレー」記録展示

2006年夏に実施されたイベントの様様をTVニュースを見た実行委員会

の学生より、イベントの一環として、「たいせつ人フォトリレー」の展示を行いたいとの提案があった。

これは、数十台の使い切りカメラを人の手から手へとリレー形式で回し、撮影された「大切な人」の写真を集めて展示するというものである。カメラと一緒に引換券もフィルムの枚数分だけあらかじめ用意されており、撮影をした人は、会場にて、自分が撮った写真を持ち帰ることができるようになっている。

2005年より、松山市内の額縁製作工房「額師・風雅」のメンバーが主催して始めたもので、初年度は60数台のカメラを知人の間で回し、集まった写真を市内のギャラリーにて展示した。また、次年度は、アートNPO「QACOA」がアサヒビール文化振興財団より支援を受けて行ったアートイベント「三津浜アートの渡し」の一環として、松山市三津浜の「池田商店」にて、写真展示を行った。

2006年10月末ごろより、発案者の学生と共同研究者とで、このアートイベントの主催者である額縁製作工房「額師・風雅」のメンバーを訪れ、協議をした。その結果、「フォトリレー」は2007年度に改めて共同開催のかたちで行うことを決定した。

2006年度はその「予告編」も兼ねて、「風雅」とアートNPO「QACOA」が2006年夏に松山市三津地区にて共同開催した「たいせつ人フォトリレー」の記録展示を行った。写真展示に用いた木枠に、使いきりカメラに一台一台つけるキャラクター（写真を引き取るときの識別用と、不特定多数の人の手に渡るカメラに愛着を持ってもらい、返却率を高めるため）のイラストや、イベントの準備の模様や写真展示の様子を写した記録写真、実際に用いたカメラセット（カメラの識別番号やイラストのシールを貼ったファイルケース、使いきりカメラ本体、イベントの趣旨や参加方法を記した取扱説明書など）などを貼付し、展示した。イベント当日は「額師・風雅」のメンバーも会場に待機し、展示の見学者に説明を行ったり、「ミーツ・アーツ・オ

ーペンカレッジ」(後述)の参加者と意見交換をしたりした。

・「たいせつ人フォトリレー」

「まつやま灯明」とは別個に、「額師・風雅」、アートNPO「QACOA」及び松山大学学生有志による「フォトリレーゼミナール」の三者で構成される「たいせつ人フォトリレープロジェクトチーム」を発足させ、約1年間の準備期間を経て2007年11月に開催した。実施に当たっては、松山大学教育研究助成のみならず、「アサヒビール文化振興財団」による資金援助や、「(株)フジフィルム」による使い切りカメラ360個の無償提供も得ることができた。

イベントの趣旨及び参加方法、写真が展示される日時や場所などを説明した「説明書」や、カメラの返送用封筒、展示会場を訪れた人に写真を返却するための「写真引き換え券」とともに使い切りカメラを、人の手から手へと回していき、それぞれの「たいせつな人」を撮影してもらう。最後まで撮り終わったら、カメラを主催者に返送する。主催者はそれぞれのカメラに収められていた写真を現像し、撮影された順番どおりにならべて展示する。2007年度の「フォトリレー」では、約2,000枚の「たいせつな人」の写真が集まり、愛媛県美術館ロビーにて3日間の展示を行った。

・「ミーツ・アーツ・オープンカレッジ」¹⁾

アートNPO「QACOA」が2006年度に開催した、5回シリーズの連続講座である。「地域とアート」について優れた見識と経験を持ち、最先端の現場に立つ講師を全国から招聘し、オープンカレッジ方式で勉強会を重ねることで、アートの社会的な関わりを模索し、地域と橋渡しが出来する繋ぎ手となる人材を育てること、「QACOA」が参加者と共に成長し、個々のスキルとネットワークを広げること、などを目標としている。

この第2回目の講座を、松山大学にて、灯明イベントと同日に開催した。直島地中美術館館長(現・金沢21世紀美術館館長)の秋山氏をゲストに招

1) その詳細については、アートNPO「QACOA」ブログ <http://qacoa.blog.ocn.ne.jp/artnpo/2006/12/index.html> を参照のこと。

き、一部は講演形式でアートと地域について「学ぶ」、二部は参加者との「対話」によって「考える」ワークショップ形式で行った。講座終了後、カルフルに会場を移し、講師、参加者達が灯明を楽しみ、学生達との交流を深めた。

2008年度は7年目のイベント実施となった。

手作りの灯明を並べ、あかりの地上絵を描くというこのイベントは、誰でも比較的容易に作業に参加でき、達成感を共有できることから、異業種・異世代の参加者の自然な交流を促す効果もあり、まちづくりのツールとしても活用できるものと思われる。

学生達が手作りで複数の児童画からグラウンドを画面にした灯明アートへとまとめていく編集作業を行い、想いをかたちにまとめて行く過程を体験することで、創造性と協調性を育むという効果も期待される。

企画を実現させるにあたっては、さまざまな人の協力が必要となるため、学生たちは地域資源を発見し、交渉を行って、助言や協力を仰がねばならない。学部や学年はもとより、世代や職種などの違いを越えてひとつの企画を実現するという体験を通じ、コミュニケーション能力を養ったり、地域社会への関心を高めたりすることが狙いである。

また、会場設営の作業は、障害の有無にもかかわらず、異業種・異世代の人々が比較的容易に参加でき、達成感を共有できるものであることから、自然な交流のきっかけづくりとしても一定の効果があるものと思われる。

こうしたことから、本プログラムは、2002年度、2003年度には伊予銀行寄附講座「まちづくり学講座」の一環として行われてきた。それ以降は教員個人が松山大学独自の教育研究助成事業による助成を受けて実施するかたちをとっている。

イベントのアイデアについては、福岡市の「博多部まちづくり協議会」が主催してきた「博多部灯明ウォッチング」に大部分を依拠している。イベントの狙いは、元来、歩く速度でまちなみに触れる機会をつくり、まちの良さ、ある

いは改善点を参加者に認識してもらうことにあったが、回を重ねるごとに、イベントの実施に至るプロセスそれ自体の意義も認識されるようになってきた。作業の場は、異業種・異世代の参加者同士の出会いや相互理解のきっかけともなる。共同作業の成果がはっきりと見えるため、参加者は達成感を共有しやすい。また、イベント自体はまちをあかりでライトアップするという、きわめて単純なものであるため、環境、地域福祉、交通社会実験など、まちづくりに関わる様々なテーマを自由に絡めることも容易である。加えて、材料は非常に安価で入手が容易なものばかりで、実施コストは比較的低い。

「まつやま灯明ウォッチング」についても、本来の趣旨からいえば、地域の中での実施が望ましいといえる。現在は、イベントの会場は大学とする代わり、大学の中に地域内外の様々な社会資源を呼び込み、ネットワークづくりを図ることに主眼を置いている。

1-2) 運営体制

① 実行委員会

イベントの企画・運営は、従来から、学生有志を中心に、学内外のボランティアによるものとしている。参加協力者の募集は、ゼミや講義、学外での市民活動の場での告知や、他の教職員の紹介などを通じて行っている。

実行委員会は、ここ数年来、イベント実施の1ヶ月前頃より開いている。1回にかける時間は、およそ1時間から、長くても2時間程度としている。2008年度は、メンバーの事情を勘案し、皆が集まりやすい昼休みの45分間に会議を行っていた。

1回の会議における大まかな流れは、以下のとおりである。

・灯明イベントの概要や狙いに関する説明

初回は15分程度、パワーポイントで画像などを見せつつ説明を行う（イメージをつかみ、モチベーションを高めるには、ヴィジュアルを示した方が効果的である）。以後、新規参入者が増えるたびに簡潔に説明する。初回以

降は、先輩学生に説明をしてもらうこともある。

- ・メンバー自己紹介

新規参入者のあるたびに5～10分程度行う。

- ・企画会議、役割分担決定、進行状況確認

初めの2, 3回で企画の内容をほぼ固めてしまい、役割分担も決定する。その後、参加者全員で毎回準備の進行状況を確認する。これらは毎回30分～1時間程度行う。協力者となる個人・団体の活動内容などについても、なるべく簡潔に説明をし、関心をもってもらうように心がける。特に、準備期間中に関連する催しなどがあれば情報提供を行い、参加も呼びかける。

- ・スケジュール確認

学生の多くはアルバイトをしており、シフトは1ヶ月前に決まってしまう。そのため、なるべく早期にスケジュールを固め、何度も確認を行うことで、確実に時間を確保してもらうことが重要となる。

実行委員会に参画した学生たちに対しては、

- ・学部や学年の違いを越えて幅広い交流の機会をもたせる
- ・個々の学生からアイデアを引き出し、実現につなげるために適宜助言をする（せっかくのアイデアを簡単にあきらめさせない）
- ・ゼミや講義における学習の発展になるべくつながるように役割分担を配慮し、学外との接触の機会を作る
- ・個々の学生の経験や資質などに配慮しつつ、達成感につながるような課題を割り振る

などの点に留意することが重要である。

強制参加ではなく、自主性をなるべく尊重するかたちですすめるため、モチベーションの維持・向上が大きな課題である。特に未経験者はイベントの全体像や意義などをつかみづらい面もあるため、実行委員会の前後や作業中にも

個々人に向けて声をかけるようにするとともに、先輩学生などにも配慮を促している。

ミーティングやワークショップの場は、学内の食堂や談話室など、不特定多数の学生が集まるオープンスペースを敢えて選んでいる。このプログラムについて、なるべく多くの学生たちに興味・関心を持ってもらうためである。ミーティングやワークショップに既に参加している学生たちも、そうした場面で友人・知人に遭遇することで、イベントについて話をしたり勧誘したりするきっかけがつかみやすくなるようである。

実行委員会に参加していない講義の受講生などにも、折々に（講義の妨げにならないかたちで）、活動の進行状況を知らせ、できる範囲での参加・協力を促す。また、何らかのかたちで活動に参加した場合は、その体験レポートを作成し、提出することも推奨している（その他、学内外で行われている講演会・シンポジウム・研究会やボランティア活動などの情報提供も普段から行っており、それらに学生が参加した場合も同様の扱いをしている）。単なる「労働力」として機械的にイベントを「手伝う」だけに終わらせるのではなく、プログラムの本来の趣旨である「異業種・異世代間の交流」を体験しに、客観的な視点からイベントの運営体制や社会への効用、課題などを観察・分析する機会を、なるべく多くの学生に提供するのが狙いである。レポートの分量は、1回でも活動に参加し、周囲を観察しながら深くコミットしていれば比較的容易に書けるが、ただその場において、周囲とのコミットメントを持たずに機械的に作業を行っただけでは規定の字数を埋めるのは難しい、というものを企図している。レポート作成の意思がある学生には特に、レポート作成に役立つと思われる情報（たとえば出店・パフォーマンスなどで参加協力してくれている市民グループの活動内容など）を提供し、他の参加者とも声を掛け合いやすい状況をつくることを心がけている。

2008年度は、3年生のゼミ生有志約5名が主体となり、2年次ゼミ生有志とともに、企画や交渉にあたる「実行委員会」を形成した。委員会の運営にお

ける教員の関与は大幅に減り、実質的にほとんど3年生のゼミ生有志が主導するかたちとなった。

彼女たちは、1年次から、あるいは2年次からのゼミ生である。入ゼミ当初からこのイベントに積極的に関わってきたというわけでは必ずしもない。学生生活を重ねるうちに、地域の様々な人々と関わったり、自ら企画を立てて実施したりする体験の必要性を認識したことが、積極的なコミットメントにつながったようである。彼女たちは、これまで接触する機会がなかった他学年のゼミへも出向き、参加を呼びかけた。

2008年度においては、実行委員会のメンバーも、イベント当日だけの参加者数も、例年に比べると少数にとどまった。学業や課外活動、就職活動などとも両立させながらの企画・運営であったため、中枢メンバーがPRに十分な時間や労力を割けなかったこと、またノウハウが必ずしも充分ではなかった一筆者が実践してきた方法については、簡単に説明はしているが一ことが理由であろう。それでもなお、学生から学生への、フェイス・トゥ・フェイスの呼びかけは、双方に一定の教育的効果をもたらしたように思われる。次年度のゼミ志望者の中には「先輩たちが周囲に的確な気配りをしながら、テキパキと企画会議を進めていくのが印象的であった。自分もゼミを通じて、そうしたスキルを身につけたい」という声もあった。

近年では、学生のコミュニケーションスキルの低下が懸念され、「リーダー養成」や「ファシリテーションスキル向上」を目指したプログラム―学外の講師を招いての―の開講の事例も散見される。しかし、その受講生であっても、学生同士の間で実際にフェイス・トゥ・フェイスのコミュニケーションの場を求め、培った能力を発揮することには、躊躇する場合も少なくないようである。今後は、この種の教育プログラムとの連携を図ることも検討する必要があるだろう。

② 教育研究の体制について

2008年度における教育研究体制は、筆者単独によるものとした。

プログラムの柱であるイベントの企画・実施にあたっては、

- ・実行委員会に参加する学生の勧誘
- ・その他参加協力を依頼する市民グループなどとのコーディネート
- ・実行委員会・ワークショップのファシリテーション
- ・その他学生への助言・指導、会場設営ボランティアのコーディネートなど

などを行った。

1-3) 成果と課題

① 学生に対する教育的効果

活動に参加した学生のレポートや事前・事後の聞き取りでは、さまざまな人と出会う楽しさや達成感などへの言及が複数見られた。ごく少人数にはとどまっているものの、イベントの準備を通じて、ゼミのテーマにつながるヒントを得たり、市民活動に参加したりするようになった学生も数名いる。本プログラムに継続的に参加協力しているいくつかの市民グループも、実行委員会やゼミの学生たちには徐々に知られるようになってきている。こうしたことから、学生のコミュニケーションスキル向上や、地域・まちづくり・市民活動への関心の高まり、異職種・異世代間コミュニケーション促進への寄与といった点については、一定程度の効果があったといえよう。

一方、学生に対する教育効果という点にかんがみれば、準備のプロセスやイベントの社会的意義についても学生自らが客観的に評価・分析し、情報発信する能力を育てることも重要となろう。実行委員会や設営ボランティアは自主参加を旨としている以上、限界はあるが、ゼミや講義などの学習内容とも関連づけながら、より発展的な学習につなげていく工夫も必要である。

2008年度においては、実行委員会の中核メンバーであった3年次生らが、

数回にわたり、地元マスコミによる取材へも対応した。また、年度末には、大街道にあるカフェ「ナチュレ」において開催したミニ研究会（学内向け PR 誌の取材を兼ねたもの）にて、学外者向けに発表及び質疑応答を行った。取材を受けるという体験により、学生たちは、単にイベントを実施するだけでなく、その社会的意義についても自分なりに考え、他者に伝えることの重要性を意識するようになったようである。

客観的評価と情報発信に関しては、「シューカツ」にも一定の効用が見られた。いわゆるエントリーシートの作成にあたり、「講義以外で力を入れたこと」のひとつに、本プログラムによるイベントの企画・実施を挙げたいとして、筆者に助言を求める者が、ゼミ内外に複数名見られる。

その際には、当初は、本プログラムの沿革や主催者側の意図などの説明に力を入れていた。しかし、経験を重ねるうちに、まず当該学生が本プログラムにどのように関わり、そこでどのような体験をし、イベントのどこに魅力や意義を見出したかなどを問いかけ、返ってきた答えを学生自らが文章にまとめるのを手伝うという手法をとるようになってきた。時間と手間はかかるが、教育的効果という観点からすれば、他人が出した「正解」を鵜呑みにするのではなく、学生が自ら考えるきっかけを与える方が、より望ましいと思われる。必要に応じて、筆者が作成した過去の報告書や、新聞記事なども学生に提供することとしている。

② 大学と地域との連携・ネットワーク形成

地域のまちづくりネットワークの確立・強化は、本プロジェクトが最終的にめざすべき大きな目標といえる。現在、全国各地であかりを用いた同様のイベントが開催されている背景を探ると、この種のプロジェクトが、まちづくりのための一種のツール（手法）としても期待されていることがわかる。事実、「博多部灯明ウォッチング」を企画・実施してきた NPO 法人「博多まちづくり」のもとへは、高層住宅の建設によって新しい住民が大量に流入し、旧住民との融

合という課題を抱えている住民グループや、市制百周年記念や市町村合併などの記念行事や観光イベントの目玉として住民参加型イベントを企画したい地方自治体などから、問い合わせや協力依頼が数多く寄せられている。

松山においても、おそらく同種の問題関心から、イベントの体験に関する講演や執筆などの依頼も増えてきている。2008年度は、伊予市にて開催が予定されていた「オレンジデー」の企画の一環として、双海海岸の砂浜のライトアップをしたいとの要望があり、学生自らが、企画の意義やノウハウについて説明を行った。

一方、プログラムの運営体制については、既に以前の助成プログラム報告書において、以下のような点を課題として挙げている。

- ・現在とはどちらかといえば特定の個人を中心とした放射線状となっているネットワークを、参加者同士の横の連携強化によって網目状のものに近づけていくことが重要であろう。
- ・現在は季節限定型ともいべきかたちの参加者間のネットワークがより恒常的に機能し得るよう、新たな展開が望まれる。
- ・現在のネットワークは、いわば「志縁」偏重ともいべきかたちとなっている。すなわち、参加者の層が、従前より市民活動やまちづくりに関する理解や問題関心を一定程度共有している人々に限定される傾向が見られる。とくに大学周辺の地域へもより幅広く働きかけ、「志縁」と「地縁」のバランスがとれた人的ネットワークの構築が望まれよう。また、現在は、大学主体の企画に地域を巻き込むかたちとなっている。イベント本来の趣旨からすれば、将来的には、大学側が側面支援を行い、地域主体の企画の誘発をもたらすようなあり方へのシフトも、考慮に入れる必要があろう。

2. 関連教育プログラム

ー 地域社会への関心を高めるための取り組み

上記のイベント実施に加え、筆者は、1年間を通じて、学生と、様々な「地

域資源」との接触の機会を持たせるように努めてきた。以下、その取り組みについて、演習科目・講義科目・その他に分けて述べることにしたい。

2-1) 演習科目

筆者の所属する松山大学法学部における演習科目（ゼミ）は、1年生対象の基礎演習Ⅰ、2年生対象の基礎演習Ⅱ、3年生対象の専門演習Ⅰ、4年生対象の専門演習Ⅱである。基礎演習は選択科目、専門演習は必修科目となっており、専門演習は基本的に2年間続けて同一の教員が担当するゼミに所属することとなっている。

基礎演習Ⅰの履修者は、入学前の提出書類を元に、事務によって各ゼミへ振り分けられているが、2年次以降の演習の履修者は、各ゼミの担当者による選考を経て、振り分けられる。

筆者は「『協働型まちづくり』を考える」というテーマで、各学年の演習科目を開講している。

入ゼミ希望者には、毎年、各ゼミ共通の志望書に加え、800字程度のレポートを課すとともに、初めてゼミを希望する学生に対しては面接を課すこととしている。

レポートの課題は、サントリーによる「サントリー地域文化賞」や「メセナ協議会」による「メセナ大賞」などの受賞団体またはその候補となっている団体の活動について、簡単にまとめるとともに、理由を付して自分なりに評価を下すというものとしている。ゼミの募集要項の公開から提出書類の締切日まで日が浅いため、インターネットでの情報収集で事足りるということのほかにも、様々な地域活動のあり方について知識を得、評価のポイントを学生がつかむ手がかりとなることを期待している。

また、面接は、「生きがい交流センターしみず」の利用者との合同昼食会や、イベントの実行委員会や準備作業などを兼ねて行っている。入ゼミ前の段階から、なるべく他学年の学生や学外者などとの接触の機会を持たせる意図がある。

基礎演習の初回には、「まちドック」²⁾を参考に、暮らしやすいまちの条件とは何か、またそのためには誰の働きが期待されるか、というテーマで、フリーディスカッションを行い、そこで出された意見をもとに、調査研究のテーマを決め、グループ分けをした。

また、研究の手がかりとなるよう、5月半ばまでは時間をかけ、学外での見学やゲストスピーカーを多く取り入れた。以下、筆者の発案により実現したものをいくつか挙げておく。括弧内は実施した演習科目名である。

・(基礎演習Ⅰ及びⅡ)「生きがい交流センターしみず」見学

小学校の余裕教室を利用した地域福祉拠点としては、四国唯一の施設である同センターの見学を行い、施設内におけるバリアフリーの工夫について学んだ。また、同センターの事務局を運営している松山市社会福祉協議会の職員から、センターの概要や、地域福祉についての基本的な考え方などについて、レクチャーを受けた。

・(基礎演習Ⅱ) NPO 法人「俳句甲子園実行委員会」実行委員長・山本 修嗣氏及び松山氏農林水産振興課 白川氏

企業及び行政組織で働く社会人が、仕事とは別個に、地域社会にどのような関わり方をしているか、をテーマに、両氏が関わっている「俳句甲子園」及び「ソーシャル・アクション・スクール」(社会人と学生とが対等な立場でまちづくりについて学び、政策提言の内容を競う企画。全国数か所にて開催されている)などの具体的事例についてレクチャーを受けた。

・(基礎演習Ⅰ, Ⅱ) 愛媛頸椎損傷者連絡会 坂本 一彦氏

電動車椅子で移動する坂本氏と学生とでキャンパス内をめぐり、学内におけるバリアフリー状況を実際に確認した。また、その後の懇談会では、頸椎損傷という重い身体障害を抱えた人が、日常生活の中でどのような不便を抱

2) 鳥根大学法文学部准教授である毎熊浩一ゼミ生と松江市民有志により作成された、まちの評価票である。詳細については、毎熊浩一(2007)「市民の行政統制術・鼎談編—『まちドック』からみた松江市民行政経営の一断面」『季刊行政管理研究』118号、ぎょうせい、45-66ページを参照のこと。

えているか、また、地域の中で自立した生活を送るための環境づくりに必要なものとは何か、などといったことについて、意見交換を行った。

- ・（専門演習Ⅰ，基礎演習Ⅱ）カフェ「ナチュレ」店長 藤山 健氏

実際に店舗に出向き、（ゼミ生同士の懇親会も兼ねて）メニューの試食を行うとともに、安全・安心な食を提案する個店としての取り組みと、大街道商店街振興組合役員の立場から、商店街全体での取り組みの両面から、商店街の振興やまちの活性化について、レクチャーを受けた。

- ・（専門演習Ⅰ）「有マルコボ・コム」 山澤 香奈氏

松山市の夏の風物詩となりつつある「俳句甲子園」の出場経験者でもあり、現在は、俳句を用いたイベントの企画・実施や出版などにかかわる会社に勤務する同氏から、松山の地域資源の一つである俳句の魅力についてレクチャーを受けた。

- ・（専門演習Ⅰ）近畿大学学生との交流会

松山市及びその近郊における調査のために来松した近畿大学の学生と、愛媛の地域資源に関する意見交換会を行った。

- ・（基礎演習Ⅱ）道後商店街振興組合理事長 石丸 明義氏

道後の歴史と、まちづくり活動の現状と課題について、レクチャーを受けた。

これらのレクチャーや見学をヒントに、ゼミ生の中には、ささやかな「地域貢献」の機会を得る者も出てきた。以下、その例を挙げておく。

- ・「俳句甲子園」全国大会出場者向け中央商店街ランチマップの作成

商店街活性化をテーマに選んだ3年次ゼミの1グループが、前述の藤山氏に対してヒアリングを試みたところ、当時、商店街が検討していたマップづくりへの参画を提案された。一方、「俳句甲子園実行委員会」では、大街道商店街アーケード内にて予選を行っている「俳句甲子園全国大会」の出場者に対し、まちの情報を提供する方法を模索していた。その両者を仲介し、甲

斐研究室の名義で「ランチマップ」を作成・配布することとした。

- ・中央商店街における放置自転車及び自転車通行に関するアンケート調査

松山市における担当部局の職員に対するヒアリングがきっかけとなり、本学学生を対象として、実態に即した意識調査を行った。調査表の作成にあたっては、「サイクルガイド」のボランティアも体験した。

調査票は約390票を回収し、その調査結果は、松山市自転車対策協議会にて配布された。また、翌年度には、同協議会において、当該学生自らが調査結果を発表する機会も得ることができた。

- ・特産物を活かしたお菓子の試作及び試食会

2008年度に実施した「まつやま灯明ウォッチング」において、地産地消を調査研究テーマにした2年生のグループが、キウイやかんきつ類など地域の特産物を活かしたお菓子を考案し、来訪者に振る舞った。

2-2) 講義科目

筆者が本学において担当する講義科目は、行政学（2年次以上を対象として通年開講4単位）、政治学概論Ⅰ（1年次以上を対象として前期開講、2単位）及びⅡ（1年次以上を対象として後期開講、2単位）、政治過程論（3年次以上を対象として通年開講、4単位）である。いずれも（旧カリキュラムにおいては、政治学概論は必修であったが）選択科目である。

近年では、政治的課題の多元化・複雑化に加え、政治に対する不信任感・無力感から、若年層の間には政治的無関心も広がっている。何のための政治・行政であるか、また、政治的無関心から来る投票率の低下を食い止めるために、どのような努力がなされているのかを実感する機会を与えるため、政治学概論Ⅰの講義では、愛媛頸椎損傷者連絡会の坂本一彦氏及び愛媛県選挙管理委員会事務局の宇佐美伸次氏をゲストスピーカーに招き、それぞれレクチャーを受けた。

また、まちづくりへの関心を持たせるためのきっかけづくりとして、例年、

行政学の講義では、松山市が毎年募集している学生政策論文への応募を積極的に勧めてきた。

「松山市学生政策論文」の審査は、当初は書類選考によるもののみであったが、その後、予選通過者（15組程度）によるプレゼンテーション審査も行われるようになり、一層高い教育効果が期待されるようになった。

予選を通過した受講生に対しては自己申告を促し、講義時間以外に、プレゼンテーション用資料の作成に関する助言や、発表のリハーサル（数回程度）の時間を設けた。ゼミなどで長時間かけて準備を行ってきた他の予選通過者と比べて、彼らの場合は、論文提出までにかけた時間と手間は非常に少ない。そのせいもあって、その多くは、学外の審査員の前でのプレゼンテーションという未知の体験に、少なからず不安を抱くようである。しかし、そうした学生でも、リハーサルをわずか2、3回行うだけで、発声や表情などに格段の変化が見られるようになる。

予選通過者以外の受講生には、予選通過者の作品を読ませ、「もしも自分が審査員ならばどのような質問をするか」を短いレポートにまとめさせて、予選通過者にフィードバックしている。こうした作業は、予選通過者以外の受講生にも「振り返り」の機会を与えることにもなる。レポートの中には、同じ受講生の中から予選通過者が出たことへの喜びや称賛とともに、自分が「やっつけ仕事」でレポートを作成してしまったことへの反省の弁、来年度の「再チャレンジ」への意欲—もっとも、それが次年度以降に実際につながった例は、残念ながら非常に少ないと思われるが—も散見された。

2008年度は、当該科目の開講の時期（後期からとした）と、論文募集の時期（年度内に審査を終え、事業化に向けて次年度の予算編成に反映させられるよう、締切が早まった）とが噛み合わず、当該科目での応募を断念せざるを得なかった。なお、翌年度以降は、当該科目の開講時期を通年に改めている。

2-3) その他

松山大学生協関係者の協力により、生協主催の「公務員講座」などにおいて、夏季休暇中に実施されている「俳句甲子園全国大会」などのボランティアに関する情報提供を行っている。殊に、まさに不慣れな大会出場者の高校生チームをサポートする「学校担当ボランティア」は、初対面の高校生や引率の教諭とも密接にコミュニケーションをとりつつ、状況に応じて、臨機応変な対応が必要とされることから、コミュニケーションスキルの鍛錬の場となっている。筆者の講義科目の受講生には体験レポートを任意で提出させ、「ふり返し」の機会をつくると同時に、イベントの主催者へのフィードバックも行っている。

むすびにかえて

ここでは、大学による地域連携のあり方について述べ、むすびにかえることとしたい。

プログラムを支えるしくみづくりのためには、地域との「良質」なネットワークが必須であるといえる。近年、ごく一部ではあるが、行政や営利団体・非営利団体の側に、「協働」や「地域貢献」といった大義名分のもと、単なる安価な労働力や、頭数を揃えるための「動員」の対象として、学生に安易に期待する傾向が見受けられる場合もある。行政の場合には、近年、緊縮財政の下で新規性を打ち出すための試みとして、学生をターゲットとした「ゼロ予算事業」の啓発事業やイベントの実施も散見される。しかしその中には、事前の情報収集や連絡調整を充分に行っていなかったため、大学のスケジュール（たとえば試験期間など）などへの考慮が足りず、内容自体の良し悪しにかかわらず、学生に参加を呼びかけられないようなものもある。さらにはまた、ボランティアや地域貢献を謳いつつ、学生を勧誘しようとするカルト集団もあるという。学生がそうした厳しい社会の現実を知り、様々なりスクに自ら対処できる能力を養うことも、確かに必要ではある。とはいえ、学生に無用のストレスを与え、地域社会への失望や諦念を植え付けてしまうことは、却ってマイナスであろう。

そうしたリスクを防ぐためには、日頃から教職員が地域との連携を密にし、正確な情報をつかんでおく必要がある。ただし、そのためには、ただむやみに「協議会」や「連絡会議」などの「受け皿組織」を設置しただけでは不十分と言える。時には「連携」や「協働」のメリットを、ある程度目に見えるかたちで提示出来なければ、地域からの信頼は得られず、有用な情報も迅速には入ってこない。

その一方では、学生を護るために、地域（企業・団体）エゴとは適度な距離をとり、凭れ合い・狎れ合いや責任の押し付け合いを注意深く回避する必要がある。大学本来の社会的使命を考えれば、いくらか矛盾も抱えていないわけではない社会に、ただ学生を適応させることだけに注力するのではなく、社会の側に対しても自己変革を求め、その道筋を共に模索するという心構えも重要であろう。

近年では、地域連携を専門とする部署やセンター、学生ボランティアセンターなどを学内に設置する大学も増えてきている。今後は、大学における地域連携の組織的な取り組みをめぐる現状と課題についても、検証を行いたい。